

信じられることばで「生きる」と励ます

『12歳たちの伝説』シリーズ

田中すみ子

はじめに

今から約二十年前の一九九一年。ある国語教科書六年下巻申請本に掲載された後藤竜二作「お祭り村」が、教科書検定によって作品の差し替えを余儀なくされた。

当時六年生を担当していた私は、幻の教材となってしまった絵本『おまつり村』（ポプラ社）を原作として、子どもたちと劇づくりに取り組みたいと考えた。ぎくしゃくする学級に悩む日々。ひたすら物語を読み、話し合い、劇づくりの活動に夢中になった。

『12歳たちの伝説』のシリーズの中には、ゴリちゃんこと森みどり先生の印象的な授業や教育実践がいくつも登場する。

例えば、「たんぼぼ」（川崎洋）の詩の授業。

詩の中の一つの単語を隠して、子どもたちに考えさせる。正解を知っているのに言えない川口美希を、にこにこして待っているゴリちゃん。険悪だった学級を、一つの詩によって「和気あいあいって感じ」に変えてしまう。

二巻に出てくる《人間はなぜ人間になったのか?》の授業では、人間の発達を学び、ことばの大切さを知り、《生い立ちの記》へつなげていく。さらに、子どもたちによる学級新聞づくりの活動等。

これらは、たくさんの実践記録を読んだり、精力的に現場教師の話を聞いたりした作者だからこそ書けるエピソードである。とはいえ、「教育実践の報告」ではない。リアリティーを感じさせながら、独自の物語が展開する。

強いメッセージにもかかわらず、不思議と明るく楽しい読後感。その秘密を探りたい。

1 一人称で書くという挑戦

『12歳たちの伝説』（新日本出版社）の初版は二〇〇〇年六月。「少年少女新聞」に連載された『六年一組ドキドキ学級』を大幅に改稿加筆したものだという。

最初にこの本を手にしたときに驚いたのは、文体だった。一人称の語り手が章によって代わる。代わり目に、規則性